

3) 施術員の垂下方法別成長、生残試験

西森克浩

【目的】丸核をボディに挿核した改良貝は、核が内臓を圧迫するためか、死亡率が高いという真珠養殖業者の指摘があったため、垂下方法別の成長、生残試験を行った。

【方法】無核、平核、丸核の施術をした改良貝(平均殻長約112mm)をパールネットに收容したものを西の湖に垂下し(平成8年7月)、平成9年2月に成長、生残を調査した。

【結果概要】1 養成期間中の殻長の成長量を表1に示した。無核、平核については有意差は認められなかったが、丸核については危険率5%で有意差が認められた。

表1 西の湖で3種類の異なる施術をした改良貝を2種類の異なる垂下方法で養成し、養成期間中に成長した殻長(mm)の平均(±s.e.)を比較した。丸核の場合、 $H=4.89$ 、 $p=0.027 < 0.05$ 。

		施術方法		
		無殻(外套膜)	平核(外套膜)	丸核(ボディ)
垂下方法	通常	9.30±0.68	10.00±0.76	4.86±1.19
	逆吊り	10.06±0.74	10.81±0.88	7.94±0.78

2 養成期間中の生残率を表2に示した。逆吊りの方が通常より生残率が高かったが、有意差は認められなかった。

表2 西の湖で3種類の異なる施術をした改良貝を2種類の異なる垂下方法で養成し、養成期間中の生残率を比較した。丸核の場合 $\chi^2=1.15$ 、 $p=0.28 > 0.05$ 。

		施術方法		
		無殻(外套膜)	平核(外套膜)	丸核(ボディ)
垂下方法	通常	100%	100%	80%
	逆吊り	100%	100%	93%